

中国河北省承德市における寺廟研究の変化をめぐって

李 海泉

1 はじめに

中国河北省承德市は1703(康熙42)年、清朝の「避暑山荘」の建設とともに開発された。清王朝皇室の利用する承德市北の避暑山荘周辺と、避暑山荘の南部に広がる民衆の住む街区に数多くの寺廟が中華民国時代まで存在し、国の統合や地域開発、民衆の福祉など多面的役割を果たした。しかし、中華人民共和国時代に入ってから寺廟は機能しなくなった。

承德市の歴史は成立して以降、清王朝時代(1703年-1911年)、中華民国時代(旧満州国時代を含む)(1912年-1949年)と中華人民共和国時代(1949年-現在)の3つの時期に分けられる。

清王朝時代の承德市にはモンゴル、チベットなど北方民族のために多くのラマ廟が建設された。1911年清王朝が崩壊し、国の民族統合に大きな役割を果たしていたラマ廟も荒廃し、それと同時に、モンゴル族は直ちに独立するに至ったのである。

王朝時代から近代国民国家へ移り変わり、時代の流れにつれて寺廟の役割が大きく変わり、それに関する資料は、その書かれた目的や内容も推移している。この論文は承德市内の寺廟に関する資料を示し、時代による特徴を分析する。寺廟に関する資料紹介と寺廟に関する主な視野の変化を示すことが目的である。

なお、寺廟とは中国での宗教的建物の一般的呼称である。厳密には道教と民間宗教の神を祭る場所を「廟」と呼び、仏教寺院を「寺廟」と呼ぶが、本論文では宗教的建物全体を「寺廟」とする。

2 清王朝時代(1703年-1911年)

1703年に避暑山荘の建設が始まって以降、清王朝時代における承德の名称は5回も変わった。1723(雍正元)年からは熱河庁で、「庁」は行政編成上の開発地区の呼び方である。1733(雍正11)年から承德州、1740(乾隆5)年から熱河兵備道、1742(乾隆7)年から再び熱河庁、1778(乾隆43)年承德府と変化した。「府」の編成は都市になったことを意味する。

承德市の発生を知るための地方通志として、清朝前期の1756(乾隆21)年-1781(乾隆46)年に編纂された全120巻の『熱河志』と、清朝後期の1826(道光6)年-1887(光緒13)年の間に編纂された全86巻の『承德府志』がある。

ラマ廟を始めとする各種の寺廟について、『熱河志』と『承德府志』の記述は明白に避暑山荘と避暑山荘の北側に偏っている。避暑山荘の北側について清朝後期の『承德府志』は

清朝前期の『熱河志』と同じく、11箇所のラマ廟を継続的に碑文と図面を載せて詳細に記録している。

『熱河志』の記述によれば、ラマ廟の建設は先祖の業績を記念し継続していく。たとえば溥仁寺、溥善寺である。あるいは周辺少数民族部落との戦いで勝利を収め、部落が承德に帰還することを記念した、たとえば普寧寺、安遠廟がある。皇帝が秋の狩行事のため承德に駐在するとき、謁見しに来るチベット族を迎えるため、普陀宗乘之廟、須弥福寿之廟を建設した。また、多くの寺廟が立ち並び、神々が承德に揃ったという。

『承德府志』は、避暑山荘周辺の壮大な寺廟群は国内外に王朝の威厳を見せ、それによって承德は天人合一の福のある土地になったと記している。

番号	廟名	場所	年号	西暦
1	溥仁寺	在熱河行宮東三里許	康熙五十二年	1712年
2	溥善寺	在熱河行宮東溥仁寺后白歩許	康熙五十二年	1712年
3	普寧寺	在熱河行宮東北五里獅子溝	乾隆二十年	1756年
4	普佑寺	在熱河行宮東北六里許	乾隆二十五年敕建	1761年
5	安遠廟	在熱河行宮東北山麓距普寧寺東南二里許	乾隆二十四年	1760年
6	普樂寺	在熱河行宮東北二里許	乾隆三十一年	1767年
7	普陀宗乘廟	在行宮北里許	乾隆三十五年	1771年
8	殊像寺	在普陀宗乘廟西	乾隆甲午夏	1762年
9	廣安寺	在普陀宗乘廟之西	乾隆三十七年	1773年
10	羅漢堂	在行宮北里許	乾隆三十九年	1775年
11	須弥福寿廟	在府北	乾隆四十五年	1781年
12	熱河城隍廟		乾隆三十七年	1773年
13	火神廟	在西大街	康熙五十年建	1710年
14	開仁寺	在二道街	康熙五十四年建	1714年
15	觀音大士廟	在廣仁嶺北	康熙五十七年建	1717年
16	閻帝廟	在西南街	雍正十年建	1733年
17	葉王廟	在獅子溝	乾隆二十年敕修	1756年
18	龍王廟	在獅子溝	乾隆二十年敕建	1756年
19	文廟※			

※『熱河志』に「文廟」を記しているが、寺廟の枠組み(巻79)ではなく、「学校」の巻(巻73)に記されている。

番号	廟名	場所	年号	西暦
1	溥仁寺	在熱河行宮東三里許	康熙五十二年	1714年
2	溥善寺	在熱河行宮東溥仁寺后百歩許	康熙五十二年	1714年
3	普寧寺	在熱河行宮東北五里獅子溝	乾隆二十年	1756年
4	普佑寺	在熱河行宮東北六里許	乾隆二十五年敕建	1761年
5	安遠廟	在熱河行宮東北山麓距普宁寺東南二里許	乾隆二十四年	1760年
6	普樂寺	在熱河行宮東北二里許	乾隆三十一年	1767年
7	普陀宗乘廟	在行宮北里許	乾隆三十五年	1771年
8	殊像寺	在普陀宗乘廟西	乾隆甲午夏	1762年
9	廣安寺	在普陀宗乘廟之西	乾隆三十七年	1773年
10	羅漢堂	在行宮北里許	乾隆三十九年	1775年
11	須弥福寿廟	在府北	乾隆四十五年	1781年
12	開仁寺	在二道街	康熙五十年建	1712年
13	觀音大士廟	在廣仁嶺北	康熙五十七年建	1719年
14	三官廟	在南营子		
15	斗姥宮	在草市街		
16	酒仙廟	在南营同府		
17	海雲寺	在会龍山		
18	蟠桃宮	在会龍山南		
19	文廟※	在西大街		

※『承德府志』に「文廟」を記しているが、寺廟の枠組み(巻14、19、20)ではなく、「学校」(巻11)の巻に記されている。

避暑山荘の南側に広がる民衆が住む区域について、清朝前期の『熱河志』は文廟、熱河城隍廟、開仁寺、火神廟、関帝廟、龍王廟の6箇所を記している(表1)。清朝後期の『承德府志』は三官廟、斗姥宮、酒仙廟、海雲寺、蟠桃宮の5箇所を加えている(表2)。この2冊の記載から、避暑山荘南側について11箇所の寺廟が記録されていることになる。避暑山荘南側の寺廟について『熱河志』と『承德府志』の記述は異なるところがある。『熱河志』に記されたのは避暑山荘のすぐ隣りにあるものである。『承德府志』には避暑山荘からかなり離れた南の庶民の住む街区の寺廟も記されている。

『熱河志』と『承德府志』には避暑山荘南側で皇帝がみずから碑文を書き残した文廟と城隍廟についての説明があったが、ほかの9箇所は名前を記しただけである。

1780年、乾隆皇帝の70歳生誕を祝うため、朝鮮の学者朴趾源が随行者として中国に入り、東北地方、北京を訪れた。折しも乾隆皇帝が承德市にいたため、承德も訪れた。朴趾源がその間に書いた日記によると、北京から山の方に数日間に歩いて承德に入った。承德では廟、宮殿建築が壮大華麗であり、路の左右に「市」が続く、長城の外側の大きい都会であった。朴趾源一行は承德で避暑山荘の表の文廟に泊まっていたと記している。

朴趾源はまた関帝廟について次のように記述している。関帝廟は民間にたいへん人気があり、全国のどこでも広がっている。旧暦5月13日(関羽の誕生日)は祭りである。国はなんらかの災難があったときにならざる関帝廟に祭祀する。明朝の万暦皇帝は関羽に「三界伏魔大帝」、「神威遠鎮天尊」の称号を与えた(朴趾源 1997)。

3 中華民国時代(1912年-1949年)

表3 1932年熱河省承德公安局の宗教調査表

番号	寺廟あるいは教堂の名称	所在地	住職あるいは教主名姓	人数	財産 (銀元計算)	備考
1	竹林寺	省会第二区草市街	張雲山	1	1500元	アヘン常用者の公共治療所に占用
2	關母宮	省会第二区草市街	楊泰增	1	1000元	県立高級小学に占用
3	南馬神廟	省会第三区梯子山	李桂林	1	400元	
4	城隍廟	省会第三区西大街	康元吉	1	2000元	
5	隆興寺	省会第三区紅廟山	陳太英	1	2000元	
6	文昌閣	省会第三区二道牌楼	周宇宏	1	500元	
7	藥王廟	承德公安直轄二分所獅子溝	保林	1	1000元	承德県公安局直轄一分所占用
8	娘娘廟	承德公安直轄三分所石洞子溝	錢宗洁	1	250元	
9	閼帝廟	省会第一区宮門口	垂恩	1	2500元	炮兵営部占用
10	会安寺	省会第一区小南門	無		200元	住民管理
11	開仁寺	省会第一区小南門	無		200元	住民管理
12	閼帝廟	省会第一区小南門	無		400元	住民管理
13	近天禪院	省会第一区火神廟街	無		1000元	熱河省政府第一区分所占用
14	財神廟	省会第一区興隆街	無		1500元	住民管理
15	福山寺	省会第二区二仙居街	無		2000元	熱河省政府会第二区分局占用
16	火神廟	省会一区火神廟街	能智	1	1500元	
17	龍王廟	省会第二区二仙居街	昌榮	1	1000元	
18	財神廟	省会第一区板棚街	無		1000元	住民管理
19	土地祠	省会第二区二仙居街	本禄	1	1500元	
20	財神廟	省会第二区草市街	無		500元	住民管理
21	酒仙廟	省会第四区大佟沟	澄源	1	4000元	
22	馬神廟	省会第一区小西沟	無		200元	住民管理
23	三義廟	省会第二区陝西营	能義	1	800元	
24	赦孤堂	省会第三区二道牌楼	石春	1	500元	
25	宏濟寺	省会第三区粮布街	得全	1	1000元	
26	北馬神廟	省会第三区北溝	無		700元	熱河省三区二分所占用
27	閼帝廟	省会第三区粮布街	覺明	1	700元	
28	龍王廟	省会第三区西大街	無		500元	
29	海雲寺	直轄一分所会龍山	常然	1	2000元	
30	護国寺	直轄二分所獅子溝	就存	1	1000元	
31	忠義廟	直轄三分所石洞溝	無		180元	住民管理
32	雷音寺	直轄三分所石洞溝	無		150元	住民管理
33	三官廟	省会第四区南营子	静慈	1	2000元	
34	老爺廟	四区紅石岩	無		500元	公会管理
35	文廟	省会三区西大街	無		8000元	熱河省政府教育厅占用
36	扎什伦布	直轄二分所獅子溝	羅宝山	1	5000元	(ラマ教寺院)
37	布達拉	直轄二分所獅子溝	巴諾壘布桑	1	4500元	(ラマ教寺院)
38	殊像寺	直轄二分所獅子溝	清巴道壘吉	1	2000元	(ラマ教寺院)
39	普寧寺	直轄二分所獅子溝	巴拉珠壘	1	2000元	(ラマ教寺院)
40	安遠廟	直轄二分所獅子溝	管朝扎布	1	2000元	(ラマ教寺院)
41	溥善寺	直轄二分所獅子溝	尼瑪林钦	1	1500元	(ラマ教寺院)
42	溥仁寺	直轄二分所獅子溝	諾壘布林钦	1	1700元	(ラマ教寺院)
43	普樂寺	直轄二分所獅子溝	諾門桑	1	1500元	(ラマ教寺院)
44	広縁寺	直轄二分所獅子溝	拉壘根尘勒	1	1500元	(ラマ教寺院)
45	東清真寺	省会二区五条胡同	馬世誠	1	5000元	(回教寺院) 回民管理
46	西清真寺	省会三区潘家溝	李維漢	1	4000元	(回教寺院) 回民管理
47	天主堂	省会四区四条胡同	郭明道	1	2500元	
48	福音堂	省会二区草市街	德康宁	1	3000元	
49	菩薩廟	省府南胡同		1		登録しなかった寺廟
50	魁星楼	市南半壁山頂				登録しなかった寺廟
51	高廟	市西部				登録しなかった寺廟
52	広仁寺	市西部				登録しなかった寺廟
53	二郎廟	市街三道牌楼				登録しなかった寺廟
54	五火神廟	市街東部				登録しなかった寺廟

前世紀の初頭、王朝時代の終焉をむかえ、中国においても近代国民国家が誕生した。それにともない、1932年に熱河省承德公安局が宗教調査を行なった。それに基づく寺廟を表3に示した。これによると寺廟は全部で54箇所ある。その内訳は避暑山荘の北にラマ廟が9箇所あり、避暑山荘の南に道教と基層民間信仰などの寺廟45箇所があった。この調査から明らかになったのは、避暑山荘南の民衆区域の寺廟数は皇室の避暑山荘北側の寺廟数よりはるかに多いことである。ただ、調査は寺廟の中味や実際の役割については解明していない。

表4 旧満州国時代の著作に相関する承德寺廟			
著者	著作	出版年月	とりあげられた寺廟
北條太洋	熱河	昭和8年	溥善寺、溥仁寺、普寧寺、安遠廟、普佑寺、広縁寺、殊像寺、普樂寺、普陀宗乘廟、広安寺、羅漢堂、須弥福寿廟
伊東忠太	熱河遺跡の建築史的価値	昭和11年	溥仁寺、溥善寺、普寧寺、安遠廟、普佑寺、普樂寺、普陀宗乘廟、広安寺、殊像寺、羅漢堂、須弥福寿廟、文廟
関野貞、竹島卓一	熱河	昭和12年	溥仁寺、溥善寺、普寧寺、普佑寺、安遠廟、普樂寺、普陀宗乘廟、殊像寺、広安寺、羅漢堂、文廟
岸田日出刀	熱河遺蹟	昭和15年	溥仁寺、溥善寺、普寧寺、安遠廟、普佑寺、普樂寺、普陀宗乘廟、広安寺、殊像寺、羅漢堂、須弥福寿廟
五十嵐牧太	熱河古跡と西藏芸術	昭和17年	溥善寺、溥仁寺、普寧寺、安遠廟、普佑寺、普樂寺、普陀宗乘廟、広安寺、殊像寺、羅漢堂、須弥福寿廟、文廟
スベン・ヘディン	熱河	昭和18年	溥仁寺、溥善寺、普寧寺、安遠廟、普樂寺、普陀宗乘廟、殊像寺、羅漢堂、文廟、老爺廟
瀧澤俊亮	満州の街村信仰	昭和57年	ラマ廟、文廟、酒仙廟

中華民国時代において、多くの外国人が承德を訪れ、紀行文や建築学の論文を多く残したが、それらの論文のほとんどは避暑山荘北側のラマ廟をめぐるものである(表4)。1930年、9・18事変(満州事変)の前の年、スウェーデン人の学者スベン・ヘディンが北京から承德を訪れた。スベン・ヘディンは敦煌の考古学発見で学界によく知られている。彼の著作『熱河』は1944年と1978年の2回も日本語に翻訳された。スベン・ヘディンは莊嚴・華麗な建築を絶賛するとともに、文化史の偉大なモニュメントとしての一連の寺廟が清朝の終焉とともに崩壊に瀕しているのを目の当たりにし、非常に心を痛めた(スベン・ヘディン 1943)。

承德地域は旧満州国の最南端に位置する。旧満州国時代、日本政府は多くの学者を承德に派遣し、数々の記録をとらせた。1933年の北條太洋の著作『熱河』は詳細な民族誌である。北條はその著作のなかで承德は寺廟が非常に多いと記述している。そして、著作の最後に1章を設けて承德避暑山荘の北側を囲むラマ廟を概説した(北條太洋 1933)。

伊東忠太は1933年に承德を訪れ、実地調査をもとに承德の寺廟について次のような考えをもった。清王朝は異族チベットの文化を摂取して、ほとんど全く新しい建築様式を受け入れた。漢民族とチベット族の混和的な建築様式ができ、他ではほとんど見られない一種独特な建築物が承德では見られる。北京から長城を越えて承德に来ると、そこは漢民族ではなくモンゴル族、チベット族、回族などの異民族の地である。清朝は中原をとるに及んで、チベット族およびモンゴル族と手を結ばなければならない関係から、ラマ教を無条件

に取り入れた（伊東忠太 1936 : 31-40）。彼の著書は、承徳の寺廟は民族混和的な建築様式であること、ラマ教の重要性を示す内容である。

1936年、五十嵐牧太を主任として6人の建築学者が承徳に赴任した。彼らの任務は承徳にある寺廟の修理事業を前提とした現地事務所「文教部熱河重修工務所」を開設することであった。そこで承徳の寺廟実態調査を行ない、修理計画を立てた（読売新聞社 1993）。

五十嵐牧太によれば、承徳の寺廟は東亜史上重要な役割を担っている（五十嵐牧太 1942）。彼は偉大な寺廟遺跡の当時の状況を調査し、永久に保存、伝承することを切望するようになった。彼はその著作で、避暑山荘を囲むラマ廟のゾーンは清朝皇室のものであり、一般民衆にはあまりにも縁遠いものであったと書き記している。清朝の隆盛期に僧は2,000人近くいた。しかし、清朝が衰退した1940年代になると僧はわずか200人足らずとなり、隆盛期の十分の一にも満たず、ラマ廟も崩壊に直面していたと記している。また、著作によれば、チベット起源の「打鬼祭」は毎年旧暦1月13日に承徳普寧寺（通称大佛寺）の山門前で盛大に行われていた。これは魔や鬼を追い払う行事である。当日は町の近くの老若男女が参拝に来て非常に賑わっていた。

五十嵐牧太は承徳の建築的価値が十分であると評価するにとどまらず、観光的役割も論じた。将来は国立公園にすることも提言した。彼が承徳にいた1940年代当時、廢墟になったラマ廟は観光の役割を担っており、年間15,000人あまりの観光客が訪れた。五十嵐は観光客が20,000人に達することを見通して、観光収入の一部を荒廢した寺廟の修理費に充当することを検討していた（五十嵐牧太 1942）。

関野貞とその弟子の竹島卓一は1937年の承徳調査の成果にもとづき、著作を出版し、ラマ廟および文廟建築の盛況を概観し、多くの図面と写真を残した。その地図には清朝以降の文献に書かれたラマ廟と文廟の位置を記した（関野貞・竹島卓一 1936 : 図2）。関野と竹島の記述によれば、1933年以降、「秘境」にされた承徳は世に姿を現した。建築群の文化史にもたらす貢献は計り知れないだろう。承徳は熱河省の省庁所在地であり、そのうちに大いに発展する可能性があり、町の発展とともに交通状況も改善していこう、そうすると、国の内外から見物にくる観光客が間違いなく増える。そこで寺廟の保存は重要な課題になって来る（関野貞・竹島卓一 1937）と。

1940年、岸田日出刀も憧れの承徳に向かった（岸田日出刀 1940）。彼は傑出した遺跡の修理保存は満州国のためだけではなく日本の問題であり、世界のためであるという。岸田の記述によれば、伊東忠太は年間50万元の十ヶ年継続承徳遺跡修理事業を提案した。巨額なようにも聞こえるが、承徳遺跡の価値を正しく認識するならば、驚くほどの巨費ではない。岸田も寺廟に関する地図を残した（岸田日出刀 1940 : 94）。その地図が特徴的なのは避暑山荘の北側と東側のラマ廟以外に避暑山荘の南側にある文廟、城隍廟、関帝廟、火神廟も記されていることである。

民俗学分野においては、旧満州国統治時期に日本国内の宗教調査に権威のある瀧澤俊亮

が旧「満州国政府民生部教化科」からの委託を受けて、承德を含めた旧満州の民間の迷信について周密な調査を行った。瀧澤はまた清朝の歴代皇帝はチベットのラマ教を尊崇したこと、熱河の承德に多くの広大なラマ廟が勅諭で建設されたことを記している（瀧澤俊亮 1982）。

4 中華人民共和国時代（1949年－現在）

1949年中華人民共和国時代に入り、中国は文化的閉鎖状態になり、承德地域の研究は中断された。寺廟の実際的機能も失われつつあった。承德市は1950年代から中華人民共和国河北省に行政区分されることになる。1980年あたりから地域研究が徐々に再開された。天津大学建築系と承德市文物局は1978年－1980年に調査を行ない、一連のラマ廟を詳細に測量して龐大な図面を残した（天津大学建築系・承德市文物局 1980）。

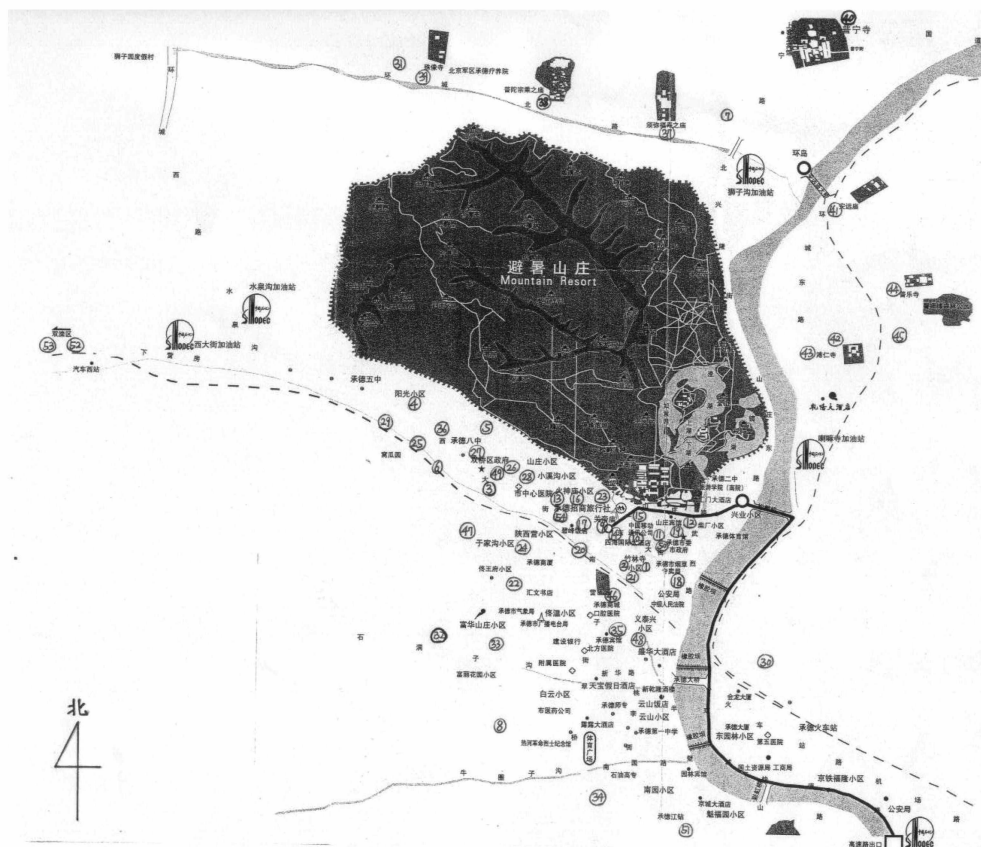


図1 避暑山莊周辺の寺廟

国民国家としてのまとまりが進行し、1985年－1991年の間に河北省承德市文物局は寺廟調査を行なった。図1は筆者が当時のデータにもとづいて作成した寺廟分布の地図である。1980年代－90年代の調査で特に注目すべきは、避暑山莊南側の庶民が利用する寺廟も調査されたことである。関野貞、竹島卓一、岸田日出刀らの地図と比べてみると、避暑山莊南側の寺廟は北側よりはるかに多いことがわかる。1932年の宗教調査でも避暑山莊南側の民間寺廟が詳しく調べられているが、それと比較してみると、中華人民共和国時代に入って

から 1980 年代までの間に、寺廟の存続状況は大きく変わり、神体も住職もすでに追い出されていた。

1980 の調査は従来の承德研究でなされなかった寺廟の役割や民衆とのかかわりなども聞き取りによって進められていた。高齢の市民への聞き取りによって、かつての利用状況を復元したのである。民衆の暮らしが寺廟と緊密な関係があったことを、承德市の長老や市民が証言した。

民間出資の寺廟は規模が小さく、建築もラマ廟のような豪華なものではなかったが、しかし、大変な人気を集めていた（蘭晓冬 2008：145）。

筆者も 2010－2011 年の間に承德市内において聞き取り調査をした。以下の各寺廟の特徴は承德市文物局研究員の蘭晓冬のまとめた『承德寺廟』と『承德寺廟概覧』の記載を元にした。はじめにその文献から記し、続いて筆者が行なった聞き取りを記した。筆者の部分は文末（ ）内に話者の氏名、性別、生年を記載した。

(1) 竹林寺

- ・ 宗教寺廟にとって竹林は「仙」「佛」の境であるとみなす。
- ・ 中華民国期、アヘン常用者の治療施設として使われていた。
- ・ 竹はよく生える植物であるので、妊娠を望むために参拝する人が多かった（牛伯忱、男、1951 年生まれ）。

(2) 開仁寺

- ・ 関帝廟である。避暑山荘のすぐ近くにあり、避暑山荘と関連性があるという。康熙帝が書いた避暑山荘碑文が中にある（尹忠、男、1926 年生まれ）。

(3) 火神廟

- ・ 康熙 50（1711）年に建設された。火災防止の意識に備えて建てられたのである。旧暦 1 月 15 日は「灯節」であり、「火神」の祭日でもある。毎年のもつりは半月におよび、たいへんにぎやかだった。多くの百姓は毎年火神廟まつりに必ず参加する。新たな 1 年に災難がなく、平安であるように特に火災がないように、と願う。多くの人々は 1 年に 1 回は必ず火神廟に来ていた。1 年中平安であるように、財運がよく商売繁昌であるように願った。火神廟のもつりは中華民国期まで続いた。

(4) 海雲寺

- ・ 承德市を通る「武烈河」にあり、そこは船を引っ張る人が集まる場所である。毎年旧暦 2 月 19 日、4 月 8 日、8 月 1 日にまつりがある。その中で、4 月 8 日は春になり、気候があたたかくなって、登山参拝者にとって良い季節であり、まつりの参加者は非常に多かった（尹忠、男、1926 年生まれ）。
- ・ 1970 年代まで「張」という僧侶がいた。「文化大革命」のため、僧をやめざるを得ず、海雲寺を去っていった。海雲寺は魁星楼（廟）を管轄していた（呉、男、1953 年生ま

れ)。

(5) 忠義廟

- ・関帝廟である。旧暦5月13日はまつりがある。

(6) 東清真寺

- ・回族移民の日々の祈りや葬式などに利用した。

(7) 関帝廟

- ・漢族の百姓や商人が参拝するため作られた。
- ・関帝廟ではこの世の平安や幸福を祈る(閻道長、男、1956年生まれ)。
- ・旧暦5月13日は関帝が刀を磨く日であり、まつりを行なう。関帝が刀を磨くには、水が必要である。だから、その日は「雨節」ともいう(于老師、男、1947年生まれ)。
- ・旅館としてモンゴルからきた首長貴族たちが泊まっていた(白、女、1935年生まれ)。

(8) 高廟

- ・関帝廟である。毎年の春と秋および旧暦5月13日は祭礼を行なう、祭礼の後は百姓の招きと司会によりここで「野芝居」を行なう。

(9) 赦孤堂

- ・赦孤堂は当時北京など各地にある「普濟堂」、「育児堂」と同じく、禅宗佛教の慈善事業をした。「孤魂」のために祈り、同時に孤児を収容し、布施などの活動をする。毎年の「清明節」に「孤魂」を「済渡」する法会を行う(尹忠、男、1926年生まれ)。

(10) 酒仙廟

- ・毎年旧暦2月2日、4月8日はまつりを行なう日である、「正日子」(正式の日)の前後各1日、廟の前の大きなステージで連続の大型芝居をやっていた。廟内では3日間まつりをする。そのときに盛大な「打春」「埋鷲元」などの芝居をやっていた。参拝者は官僚、商人、職人、および百姓であった。
- ・「酒仙」廟だから、まつりの間に市民が酒、肉などのご馳走で招待されて、たいへん楽しんでた(劉玉琳さん、男、1934年生まれ)。
- ・各業界130の業種の祖師神の位牌を祀り、各業界の職人が参拝する。商工会議所の所在地であり、政府と交渉できる力をもっていた廟である。清朝の乾隆期にイギリスから来た使節団はこの廟に泊まっていた(傅国強、男、1962年生まれ)。
- ・「五行八作」(多くの業種)の職人が参拝するところである(牛伯忱、男、1951年生まれ)。

(11) 三官廟

- ・中華人民共和国以降三官廟は小学校の教室として使われていた。その後教師の住宅になった。
- ・劇楼と門殿の間の広場に粥布施の場所を設け、毎年11月から翌年の2月まで粥を布施する。地方の官僚がリードして、裕福な家庭から寄付を募り、食糧を購入する。廟

の僧侶が粥をつくり、貧しい住民に施して、寒い冬を過ごせるようにする（尹忠、男、1926年生まれ）。

(12) 菓王廟

- ・ 病気治療と除災のため、参拝者が多かった。旧暦2月2日は祭りであり、3日間連続で芝居を行い、これは中華人民共和国期までに続いた。旧暦の4月28日は菓王の誕生日である。旧暦の年末は特に参拝者が多く、廟の外にも線香を燃やすところを設けた（尹忠、男、1926年生まれ）。

(13) 西清真寺

- ・ 回族の寺で、乾隆中期、承德への回族移民が増えて東清真寺だけでは足りなくなったため建設された。
- ・ 回族の「齋節」や礼拝日、葬礼などのときに利用する。特別な日に墓参りせず、清真寺にいつて亡くなった親族のために祈る。「寺師傅」（清真寺の聖職者）が祈ってくれる（丁、女、1961年生まれ）。
- ・ 回族はひつじを殺すとき、「寺師傅」にまず清真寺で祈ってもらおう。ひつじを殺すのも寺師傅である（李森林、男、1931年生）。

(14) 城隍廟

- ・ 「城隍」神は都市の安全を守る神である。道教の中で他界の靈魂を司る。
- ・ 漢族の宗教では幽霊界を管理する廟である。旧暦1月5日と5月5日は祭りである（趙道士、男、1963年生まれ）。
- ・ 中華民国期まで、市民は「城隍神」を担いで、にぎやかに神輿をやっていた。雨乞いにも利用していた（尹忠、男、1926年生まれ）。
- ・ 城隍廟はイコール市政府、あの世に関係する市政府である（張、女、1954年生まれ）。
- ・ 旧暦7月15日、墓参せず、城隍廟で亡くなった親族のために線香を燃やして祈る（王、女、1964年生まれ）。

(15) 文廟

- ・ 文廟は熱河地区文化教育の発祥地である。文廟が開設してからこの地域の人々は勉学をし始めた。承德府の学生は科挙などの試験の際によく第1位をとっていた。毎年の祭礼においては熱河地区最高首長である熱河都統がみずから司る。
- ・ 中華民国期は文廟中学校と文廟小学校を開設していた。春、秋2回「祭孔」の祭礼を行なう。8月27日は孔子の誕生日であり、祭礼を行なう。祭礼のときに「至聖大哉」（「祭孔賛歌」）という歌を歌っていた（尹忠、男、1926年生まれ）。
- ・ 中華民国時代まで、知識人が集まる場所であった（劉玉琳、男、1934年生まれ）。
- ・ 1950年代、文廟で会議をしたり、映画を見たりしていた（李森林、男、1931年生）。

(16) 夏公祠

- ・ 夏熙という承德地方の官僚を記念するために造られた。夏熙は難民を救うため承德に

2つの粥布施場を設けた。東粥布施場は「三官廟」に設置し、西粥布施場は頭道牌楼（「普陀禅院」）に開設した。夏熙は富裕な家から金や食糧の寄付を募った。粥布施は毎年の旧暦11月1日から始まり、翌年の2月に終わる。1回に大人は大型のひしゃく1杯、こどもは小型のひしゃく1杯を受ける。また、西大街に留養局を設置して、ホームレースを収容する。貧者の防寒や飢餓に対処する。経費を質庫（銀行）に貯蓄して、その利子で必要のある民に食糧や防寒具を購入して与える。

(17) 九雲頂娘娘廟

- ・4月18日はまつりである。まつりはたいへんにぎやかであり、承德地域の大きなイベントであった。承德市周辺の信者は「五体投地」（うつ伏せになって全身を地につけて祈る）で祈りに来る。中華民国期にここは承德寺廟の中心地であった（劉玉琳、男、1934年生まれ）。

(18) 小龍王廟

- ・清朝時代の官僚はまず雨乞いを司る龍王廟を参拝しなければならない。
- ・まつりはたいへんにぎやかで、参拝や芝居などの行事を行なう。
- ・旧暦の6月13日は龍王廟のまつりである（李森林、男、1931年生）。

(19) 普陀禅院

- ・この廟は粥布施の場であった。冬季、承德市の貧しい住民のための粥布施など援助の場所であった。

(20) 文昌閣

- ・旧暦の2月2日は祭りで、芝居は数日間続けて行われ、たいへんにぎやかだった。
- ・文廟と関連性がある。科挙に参加する知識人が参拝する廟である。（劉玉琳、男、1934年生まれ）。

(21) 魁星楼

- ・科挙に参加する知識人が参拝する廟である。雨乞いにも利用されていた（任道士、男、1950年生まれ）。

(22) 先農壇

- ・毎年の「立春」と「谷雨」（4月）に祭礼を行なう。地方官吏が出席し、畑の仕事の芝居をし、農耕が始まるのを宣言する。そして、天候が農業生産にとって順調であるように祈る（尹忠、男、1926年生まれ）。

(23) 宏濟寺

- ・関帝廟である。

(24) 三義廟

- ・三義廟は関帝廟である（于老師、男、1947年生まれ）。

(25) 福山寺

- ・寺廟内に鐘楼と鼓楼の2つの建物がある。この寺廟はよく「鐘鼓楼」と呼ばれる。中

華人民共和国期から鐘鼓楼小学校になっていた。

(26) 北馬神廟

- ・葬式を行ない、他界の亡霊のために祈る廟である。

(27) 隆興寺

- ・旧満州国時代に文廟小学校分校になっていた。
- ・関帝廟である。廟の外観は赤い色が目立っていたため紅廟と俗称される（張、男、1940年生まれ）。

(28) 南馬神廟

- ・この廟は死者の魂を送るためのもので、死者のゆく道を教える。俗称は「接三」である。親族は死者のため祈りに来る。

(29) 斗姥宮

- ・斗姥は道教の中の女神で、北斗群星の母である。ここは旧満州国時代に学校として利用された。

(30) 土地祠

- ・土地の神「土地爺」を祀っている（張、男、1940年生まれ）。

(31) 河神廟

- ・河神を祀る。毎年の旧暦7月15日は祭日で、盂蘭盆会である。祭礼を行うとき、河神廟西側の徳恵門広場に「法台」をつくり、亡霊や河にながされた「孤魂野鬼」のために祈った。「紙札舗（店）」は大きな船（紙で）をつくり、上に目蓮僧と他界の72の管理者を飾る。盂蘭盆会に際して和尚、道士、ラマを招き3日間祈り「超度」する。その後紙の船を街沿いから武烈河の東橋下に運んで焼く。納骨の場所としても利用されていた（尹忠、男、1926年生まれ）。

(32) 西龍王廟

- ・墓は安らぐことができる場所である。先祖の墓をつくるとき「天星地禁」を犯したら、子孫は悪い運に遭うが、経を読み、龍王を招いたら、災難を免れ福が訪れる。1930年代初頭、この廟は熱河省女子師範学校として使われていた。承德は数箇所の龍王廟をつくった。
- ・龍王は伝説の中で雲、雨を司る神である。龍王は旱魃を防ぎ雨を降らせる神である（李森林、男、1931年生）。

(33) 節孝祠

- ・家族の中の目上の者や夫に対する行動が評価される女性の位牌を立てる。春、秋に祭礼がある（牛伯忱、男、1951年生まれ）。

以上の聞き取り調査で明らかになったことを以下に記す。

まず、関帝を祀る廟が多い。具体的には開仁寺、忠義廟、関帝廟、高廟、宏濟寺、三義

廟、隆興寺である。そこには漢族の百姓、商人といった庶民が参拝し、祭礼時には芝居など催事が行なわれ、たいへんにぎわった。

次に、貧者にたいして、粥などの布施を行なっていた廟が多い。これには普陀禅院、三官廟、夏公祠がある。

農耕に関する祭祀を行なう廟があり、小龍王廟、先農壇、土地祠、西龍王廟である。

また、科挙など学問に関する祭祀を行なう廟がある。具体的には文廟、文昌閣、魁星楼である。

この世と他界の交流儀礼を司る廟として、河神廟、城隍廟と馬神廟がある。

女性のための廟は竹林寺、斗姥宮、九雲頂娘娘廟、節孝祠である。

5 まとめ

(1) 表1と表2に示したように、王朝時代の『熱河志』と『承德府志』の記載は避暑山荘周辺の寺廟を重視し、特にモンゴル族のためにつくったラマ廟に偏る。

王朝時代が終わり、清王朝皇室が退いたことによって、皇帝が絡んでいた豪華なラマ廟は「廢墟」になり、文化史の遺跡として扱われる。そのとき、日本の建築学者たちは承德が日本の植民地になった便宜を借りて承德を訪れ、それらの寺廟建築は人類史上きわめてまれな痕跡であると評価し、日本のためにも世界のためにも寺廟建築群が消滅しないように修復事業を提言した。

(2) 清王朝が崩壊し国民国家が成立して、民衆は主権を持つ「国民」になった。1932年の承德市公安局の宗教調査では、かつて存在した民衆の生活と緊密に関連する寺廟も統計の対象になった。そして、民間寺廟が多く存在したことが世間に知られた。この調査結果は承德市全体の廟を概観するもっとも詳しいものと位置づけられる。

(3) 中華民国時代の日本人学者が記録したラマ廟の数は『熱河志』『承德府志』と変わらず、11箇所であった(表4)。だが、1980年天津大学建築系が承德のラマ廟を調査したときは、8箇所しか測量できなかった。要するに中華民国時代から中華人民共和国に移行する時期に3箇所のラマ廟が失われていた。日本の建築学者たちが懸念した王朝時代の痕跡としての寺廟の崩壊は避けられなかった。

いずれの著作もラマ廟以外に漢族文化を表象する文廟(孔子廟)を記録した。文廟は中華人民共和国時代に破壊された¹⁾。

(4) 国民国家としてまとまりが進行し、1980年代以降の資料において、寺廟の存在だけではなく、その役割など内在的価値も市民への聞き取りによって証言された。避暑山荘北側のラマ廟と異なり、南側の寺廟が民衆にとって生活と生産の実践や価値観に緊密に関連し多くの役割があったことは市民への聞き取りによって明らかになった。具体的な役割としては葬式を行なう「馬神廟」や農耕の開始を宣言する「先農壇」などが挙げられる。特徴的な馬神廟は今後別にとりあげる。

- (5) 一連の文献資料の中では、王朝の権力に取り巻かれていた壮観なラマ廟と並び、文廟の存在は非常に目立っている。文廟はほかの寺廟と違ってどの時代の資料にも記録されている。伊東忠太の著作も避暑山荘南側の承德文廟について提起し、文廟は承德地域の開発と重大な関係があると位置づけた(伊東忠太 1937)。五十嵐牧太は承德文廟が相当完備し優れたものであると評価した(五十嵐牧太 1943)。承德文廟は満州の西部でもっとも影響力のある文廟であると瀧澤俊亮はいう(瀧澤俊亮 1983)。当時の熱河省承德公安局の統計によれば文廟の資本金がもっとも多かったのである(表3)。
- (6) 関帝廟が多い。名称はさまざまであるが、神として関帝を祀る廟は多く、全体の3割にあたる。
- (7) 承徳の寺廟は多民族のためにも建設され、生活全般にかかわっていた。

[注]

- 1) 文廟は文化大革命のとき破壊された。今世紀に入ってから新たに作り直し、2011年旧暦8月27日(西暦2011年9月28日)にまた開業した。旧暦8月27日は孔子の誕生日である。

[参考文献]

日本語

- 北條太洋、1933、『熱河』新光社。
五十嵐牧太、1942、『熱河古跡と西藏芸術』洪洋社。
伊東忠太、1933、『満州の文化と遺跡の史的考察』啓明会。
伊東忠太、1936、『熱河遺跡の建築史的価値』啓明会。
伊東忠太、1940、『道教思想とシナ建築芸術』啓明会。
岸田日出刀、1940、『熱河遺蹟』相模書房。
佐田弘次郎、1924、『満州旧蹟志』南満州鉄道株式会社。
スベン・ヘディン、黒川武敏訳、1943、『熱河』地平社。
スベン・ヘディン、斉藤明子訳、1978、『熱河——皇帝の都』白水社。
関野貞、竹島卓一、1937、『熱河』東方文化学院東方文化研究所。
瀧澤俊亮、1982、『満州の街村信仰』第一書房。
読売新聞社、1993、『建築巨人 伊東忠太』。

中国語

- 1888(光緒13)、『承德府志』。
蘭晓冬編、2000、『承德寺廟』黒龍江美術出版社。
蘭晓冬編、2008、『承德寺廟概覽』中国戯劇出版社。
朴趾源、1997、『熱河日記』上海書店出版社。
1782(乾隆46)、『熱河志』。
天津大学建築系・承徳市文物局、1980、『承德古建築』天津大学建築系。

所属：山口大学東アジア研究科

E-mail アドレス：ahxlee@gmail.com